

ひょうたん島通信

大植発! 第35回

岩手県大植町の気象海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大植町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大植町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



科学の役割

峰岸有紀

大気海洋研究所
国際沿岸海洋研究センター-沿岸保全分野 特任研究員

大植川に回帰したサケ (2016年12月1日、筆者撮影)。

サケの町・大植は今、サケの季節まったただ中です。海では定置網によるサケ漁が盛期を迎え、水産加工会社や鮮魚店はサケ製品の製造・販売に忙しくなります。川にはウライが設置され、そこで捕獲された親サケを使った人工受精により、来年の春先に放流する稚魚が孵化場で日々生産されています。近所の鮮魚店の店先には新巻鮭が並んで干されるようになり、家庭のポストには、贈答用の新巻鮭セットの販売開始を知らせるチラシが届きます。

しかし、今年は帰ってくるサケが少ないといえます。大植町は毎年恒例のおおつち鮭まつりの中止を発表しました。全国紙でもサケの不漁が報じられています。震災からの復興が最重要課題とされる中、町の産業を支えるサケの不漁は、大きな心配の種です。文部科学省の東北マリンサイエンス拠点形成事業において、大気海洋研究所を中心としたチームは、サケを研究課題のひとつとしています。我々の研究による基礎的な知見が、将来的な資源の確保や安定した漁獲に繋がれば、と思います。

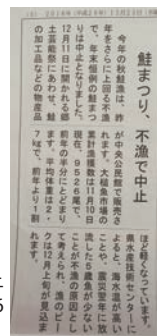
一方で、町内の川では、遠く北の冷たい海で何年も揉まれて戻って来たサケの姿を見ることが出来ます。彼らを眺めていると、頭の中では、さっきまで焦眉の課題であったはずのサケの不漁問題はちょっと脇に押され、ただ素直に「不思議だな」と思うのです。そして、海と川を行き来しながら、何百年も何千年も紡いで来た生命を引き継いで、また次世代に繋げていく彼らの歴史と生き様を解いてみたいと思うのです。

地震・津波の海洋生態系への影響や、その後の回復過程、資源の変動機構などを解明し、地域の漁業の復興・振興に資することが重要であることは言うまでもありません。しかしながら、同時に、サケをはじめとする海の生き物や、海そのものの面白さを追求し、人々に心の栄養



を提供し続けることも、科学の大切な役割ではないかと思えます。大植の沿岸センターでは、まもなく、新しい建物の建設が始まります。センターが大植の地で根を張り、枝葉を拡げていく。その肥やしとなるのは、人々の知的的好奇心かもしれません。

おおつち鮭まつりの中止を伝える大植新聞 (2016年11月23日第213号)。



調査船 弥生のつばやき

弥生の切実な願い

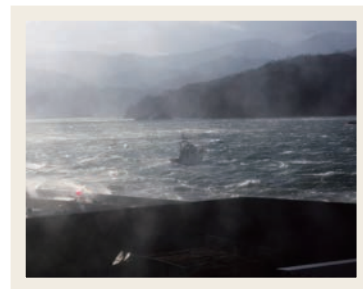


国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

国際沿岸海洋研究センター係船場の復旧工事についてお伝えしたのは、ちょうど去年の今頃でした。そこには「西風の吹き荒れる冬の大植で、寄るべき港を持たぬ心細さが身に染みます。でも、来夏には工事が終了すると思えば、滲む涙も抑えることができるような気がしています」と綴っています。しかし、どうやら今年も涙を堪えねばならなくなりました。東北太平洋岸に初めて上陸した台風10号はじめ、様々な要因によって工事は遅れに遅れ、完成予定はおおよそ半年後の来

春となったようです。沿岸センターの船舶担当職員や共同利用研究者、さらには大植の漁協関係者の皆様にお掛けしているご迷惑やご心配を思うと、いよいよ涙も枯れ果ててしまうかもしれません。後生ですから、もう台風など来ないでください。後生ですから、オリンピックによる工事費高騰や人手不足は、東京で何とかしてください。後生ですから、私の港を何とかしてください。どうにもならぬことは百も承知ですが、凜と冷え切った真っ青な空を見上げ、お天道様にお願い

するしかない今日この頃です。



寒空の下、吹き荒ぶ風と波を耐える日々です。中央付近で踏ん張っているのが私 (弥生) です。

制作：大気海洋研究所広報室 (内線：66430)